

## 適当な課題の解答解説

習近平

$$\forall \varepsilon \in \mathbb{R}_{>0}; \text{deadline} - \varepsilon < \text{提出時刻} < \text{deadline}$$

1

先に結論を言う: 函数  $f: \mathbb{R}^2 \mapsto \mathbb{R}$  が原点において連続, 偏微分可能, 全微分可能である.

ここでこの函数の全微分可能性だけ示して, 全微分可能性に第三回講義ノートの  $Thm(1), (2)$  を適用すれば, 残りの主張が正しいことが直ちに分かる.

*Proof.*  $\mathbf{h} = (h, k) \in \mathbb{R}^2, \mathbf{m} = (0, 0) \in \mathbb{R}^2$  とする.

$\varepsilon \in \mathbb{R}_{>0}$  を任意に取る. この時  $\delta = \frac{2\varepsilon}{\pi}$  とする.

$\|\mathbf{h}\| < \delta$  を満たす任意の  $\mathbf{h} \in \mathbb{R}^2$  に対し,

$$\begin{aligned} \left| \frac{f(\mathbf{h} + \mathbf{0}) - f(\mathbf{0}) - \langle \mathbf{m} \cdot \mathbf{h} \rangle}{\|\mathbf{h}\|} \right| &= \left| \frac{f(\mathbf{h})}{\|\mathbf{h}\|} \right| \leq \frac{\frac{\pi}{2} |h^2|}{\|\mathbf{h}\|} \\ &\leq \frac{\pi}{2} \|\mathbf{h}\| < \varepsilon \end{aligned}$$

よって, 原点における全微分可能性が示された. 第三回講義ノートの  $Thm(1), (2)$  より, 原点における連続性と偏微分可能性も示された.  $\square$

次に, 2 つの二階偏導関数を求める:

$$\begin{aligned} \frac{\partial f}{\partial x \partial y} \Big|_{(x,y)=(0,0)} &= 1 \\ \frac{\partial f}{\partial y \partial x} \Big|_{(x,y)=(0,0)} &= 0 \end{aligned}$$

以上の式は偏導関数を求める時に 1 階導関数を普通に微分して, 二階導関数を定義に従ってやれば以上になることが明らかである.

2

*Proof.*  $\mathbb{R}^2$  上の二項関係  $\sim$  を次のように定める:

$$(x, y) \sim (x', y') \iff ax + by = ax' + by'$$